

質的研究方法における研究者（実践者）の可視化の意味

—エピソードの活用による授業研究を通して—

○ 日本女子大学 小山聡子（2297）

キーワード：エピソード・オートエスノグラフィ・授業研究

1. 研究目的

社会福祉研究における質的方法論は百花繚乱で、一つにくくることが出来ない。しかし客観性を重視する行動科学的観察や、データの分析を通して一般化をめざす論理実証主義がとりこぼしてきたものを重視しようとする姿勢は共通している。中でも、実践者や研究者の存在を、取り替え可能で、一方的に分析し判断を下す観察者として同定するのではなく、そこにある固有の「声」を取り戻す作業をもたらす①可能性、②課題、③そうした方法の評価基準のあり方について、自身の授業研究を通して論ずることが目的である。

2. 研究の視点および方法

まず、質的研究方法の中からエピソード記述（鯨岡）、ナラティブ・アプローチ（White他）、当事者研究（浦河べてるの家）、そしてエスノグラフィにおけるオートエスノグラフィ（Ellis&Bochner）の各基盤を支える思想や理論について先行研究をレビューし、特に観察者としての研究者（教育実践者）の「可視化」が不可避となる背景について整理をする。さらに、私自身がある演習授業の「場」に含まれながら観察し、検討を加えた具体的な授業研究を取り上げ、特定のシーンをエピソードとして教員側及び学生側の双方から描き出す。その結果を通して、目的に掲げた3点を巡る考察を行う。

3. 倫理的配慮

先行研究のレビューは、日本社会福祉学会の倫理規定にのっとり進める。また、自らの授業研究については、2016年度に日本女子大学ヒトを対象とした実験研究に関する倫理審査委員会に申請し、許可を得ており、学生に説明の上、誓約書を取得済みである。

4. 研究結果

（1）先行研究のレビュー

- ① エピソード記述：鯨岡によるエピソード記述は、Merleau-PontyやHusserlの現象学を背景に持ち、間主観性から相互主体性に考えを移行させる中で、そこにいる他者を「わかる」感覚を説明した。観察主体が「場」をどうとらえたのかをさらにメタ観察する。
- ② ナラティブ・アプローチ：社会構成主義を背景に持ち、ナラティブを、語りと語られた結果の双方とし、援助「する側」を可視化することや、当事者から教えてもらう姿勢、問題の外在化、関係を変化させるリフレクティングチームなどを重視する。
- ③ 当事者研究：近年の日本では、浦川べてるの家の精神障害当事者による取り組みからそれは出発しており、背景には現象学や社会構成主義の考え方がある。「自分の苦勞の主人公

になる」というフレーズが示す通り、自身の課題に主体性を持って向き合う。

④ オートエスノグラフィ：エスノグラフィ自体、構造主義・象徴的相互作用論・フェミニズム・マルクス主義・エスノメソドロジー・批判理論・カルチュラルスタディーズなど多くの思想や理論に影響されており、その中のオートエスノグラフィとは、従来研究対象とされてきた層が研究主体に移行することに伴い、批判的に登場した面がある。

(2) 授業研究（概要とエピソードの提示）

私は、主に社会構成主義の影響を受ける形で授業研究を展開してきた。その中の一つが日本演劇教育連盟の委員長、正嘉昭とともに2009年度より2016年度に至る8年間、学部2年生を対象に実施した、ドラマの手法（演劇的手法）を用いたコミュニケーションワークショップである。「五感の覚醒」「即興性」、「正解無し、評価無し」「参加の自由」を大きな柱とするドラマの手法が学生及び教員（私）にもたらしたものを、教員（私）自身の語りと参与観察、及び学生の事後レポート分析の両面から探った。今回取り上げるエピソードは、ファシリテーター（正嘉昭）の誘い掛けに誰も出てこないシーン、すなわち教員（私）側からは消極的で間が悪く、焦燥感を持ってとらえられた場面において、同時に学生の内面には強い思いが渦巻いていた事実である。自己投企の大切さを主張することと、それを性急に押し付けることはしないファシリテーターの語りかけがあり、そのことに同意しつつもある種の物足りなさを感じていた私自身の内面への着眼が、逆にレポートに表現された学生たちの外には見えない強い思いに注目することを可能にさせた。

5. 考察と結論

取り上げた各思想や理論は、それぞれが相互に影響を与え合い、微妙に次元を異にする部分もあると同時に「関係の中の存在」として「人」を想定しているところが共通している。研究者の可視化はそこから必然化し、特に当事者研究やオートエスノグラフィは、そもそも課題に直面する当事者と研究者が同一存在である。私の取り組む授業研究は、共通性を備えたアクションリサーチである。エピソードを取り上げることによる研究者（教育者）としての自己の可視化は、「関係としての教育実践」をよりリアルに描き出すことを可能にした。また、内部質保証におけるPDCAの整備をはじめとする、短期的なビフォーアフターの明示を求められる現下の教育評価のあり方に疑問を提示することもできた。

一方、課題としては、特に授業研究の場合、成績付与の権限という「権力」が与える影響がぬぐいされないことがある。また、エピソードを使った研究一般に言えるのが、冗長になりがちなこと、よってコンパクトな中にも生き生きとしたリアリティを持たせる鍛錬が不可欠であること、及び対応して読む側の想像力醸成が必要であることと考える。

こうした研究の評価をどうするかという点は、読んだ側、聞いた側が了解可能か否かにつける。その場合、単に「わかる」と言うだけでなく、自身の課題意識を引き当て参照して、その人にとっての有用性にヒットするような、評価する側の「中間性」のようなものが必要になるのではないか。こうした研究コミュニティのすそ野を広げる努力を続けたい。